

データから見る清末民初と明治の翻訳文学

王 虹

0. はじめに

中国の近代文学の形成には西洋文学の影響だけではなく、日本文学、とりわけ日本の翻訳文学の影響も受けていた。樽本照雄氏によれば、1840年から1920年にかけて、中国で発表された翻訳小説はイギリスおよびアメリカなど英語で書かれた作品が最も多いが、その次はフランス(331種)、ロシア(133種)、日本(103種)という順である。さらに日本語の作品では、日本語に訳された西洋文学の作品が多く、およそ78種があり、すべて明治期に翻訳された作品である(樽本、1996:47)。しかし、日本語から中国語に重訳された作品の中に、科学小説や探偵小説と言ったものが多かったとしばしば指摘される。中国の翻訳者はなぜ、これらの日本語に訳された西洋文学作品を選んだのか。当時の日本において、西洋文学の翻訳はどのように行われていたのか。本論では、フランス文学の翻訳と出版を中心に、具体的な数値から、清末民国初期の翻訳文学と明治の翻訳文学のかかわりについて考察し、両国の翻訳文学の動勢を総合的に分析したうえで、日本と中国における翻訳文学の発展傾向や特徴を探る。

1. 明治日本における翻訳文学

1.1 明治翻訳文学の推移状況

明治時代の日本では、一体、どのぐらいの西洋文学が翻訳出版されたのか。1972年に出版された国立国会図書館編『明治・大正・昭和翻訳文学目録』に収録されている明治期の翻訳文学作品数はおよそ2,860点であるが、2001年に出版された川戸道昭等編『明治期翻訳文学総合年表』には4,509点の翻訳作品がある。より詳しくその45年間の翻訳文学の特徴を把握するために、本論において、筆者は上記の川戸道昭等編『年表』をもとに、年別に刊行された翻訳文学の点数を集計し、得られたデータに基づいて、グラフ(図1.1)を作ることにした。グラフ線の縦軸は毎年刊行された翻訳作品の数を表し、横軸は年代を表す。

図 1.1 明治期における翻訳文学の出版点数の推移
 (川戸道昭等編『明治期翻訳文学総合年表』による)

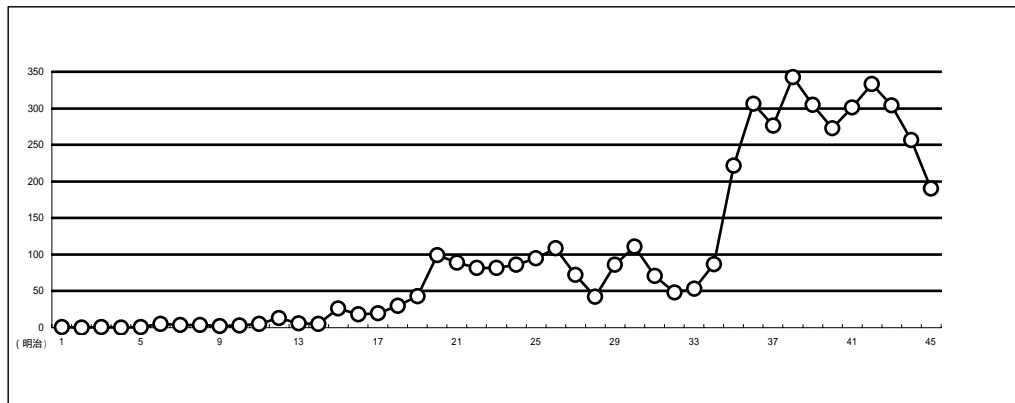


図 1.1 を見れば、明治における翻訳文学の量的側面の特徴がわかる。一言で言えば、明治時代の翻訳文学は想定されているように、一直線で発展してきたのではなく、隆盛した時期もあれば低迷の時期もあった。このような量的推移状況から、明治翻訳文学はおおむね、次の四つの時期に分けることができる。

- 第 1 期 明治元 (1868) 年から明治 11 (1878) 年頃
- 第 2 期 明治 12 (1879) 年から明治 20 (1887) 年頃
- 第 3 期 明治 21 (1888) 年から明治 34 (1901) 年頃
- 第 4 期 明治 35 (1902) 年から明治末 (1912) 年まで

その四つの時期の特徴をまとめると次のようになる。第 1 期、言わば明治最初の 10 年では、翻訳刊行された作品は少なく、毎年出る翻訳作品は殆ど一桁に留まるが、明治 11 年を境として刊行される翻訳文学の作品が増加する。第 2 期には翻訳刊行された作品の数は上昇の傾向が見られる。しかし、意外に、明治 13、4 (1880、1) 年における翻訳作品の数は同 12 (1879) 年と比べ、少なくなり、川戸道昭等編『明治期翻訳文学総合年表』に収録され、刊行が確認されたものはわずか 5 点である。明治 15 (1882) 年以降の翻訳文学は全体的に増加傾向にあり、同 20 (1887) 年に一つのピークに達する。第 3 期には、多少の波が見られるものの、明治 20 年の数を大幅に超えるような上昇は見当たらず、翻訳文学は停滞状態となっている。第 4 期は明らかに前 3 期と異なる。明治 35 (1902) 年以降、翻訳作品の数は大幅に増加し、ほぼ毎年 3 桁以上の翻訳文学作品が出

版されており、新たにその繁栄ぶりを見せた。

1.2 翻訳文学の構成の変化

以上、量的側面から明治翻訳文学の発展傾向を見てきたが、その 45 年間の翻訳文学における国別の作品構成の変化も顕著である。筆者は川戸道昭等編『明治期翻訳文学総合年表』に収録されている作品を国別で集計することを試みた(表 1.1)。簡単に述べると、明治において原作の圧倒的多数はイギリスの作品であって、その次はフランスの作品である。

表 1.1 国別でみる明治期における出版された翻訳文学の点数

総合点数	イギリス	アメリカ	フランス	ドイツ	ロシア	その他	合集
4509	1115	425	859	536	756	717	101

さらに、表 1.1 のデータを以上述べた第 1 期、第 2 期、第 3 期、第 4 期という四つの時期にわけて、翻訳刊行された作品の内訳を分析してみると、全体の変化の傾向がわかる。明治元年から明治 11 年までの時期には、イギリスやフランスの作品はほぼ全体を占めているが、明治 11 年以降はその状況が変わる。イギリスとフランスの文学作品は依然として多いとはいえ、アメリカ、ロシア、ドイツの文学作品も翻訳出版され始め、それ以外の国の作品も少なくないようである。だが、明治 35 (1902) 年以降の状況は異なってくる。イギリスの文学作品の割合は小さくなり、その代わりに、ロシア、ドイツの作品が大幅に増えたようにみえる。

さて、明治期において、具体的にどのような作品が最も多く翻訳されたのか。次はフランス文学を例にして見てみよう。

1.3 明治期における翻訳されたフランス作品

富田仁氏の『フランス小説移入考』に付された「明治期フランス文学翻訳年表」を作者別に集計し、重版、再版、出版未確認のものも含め、作品の翻訳出版回数が 5 回以上ある作者を取り上げ、その結果を 10 年ごとにまとめると、表 1.2 のようになる。これを見ると、明治期において最も多く翻訳されたのはモーパッサンの作品であり、上記の年表ではおよそ 148 回である。なお、川戸道昭等編『明治翻訳文学年表・モーパッサン編』には 231 点の翻訳作品(その内 5

点はモーパッサン偽作品ではないかと言われている)が収録されている。しかし意外にも、明治10年代、20年代には彼の作品は翻訳されていない。明らかに、モーパッサン作品の翻訳は日本における自然主義文学の隆盛とかがわりがある。

明治10年代では、ヴェルヌのものが圧倒的に多いことは表1.2から分かる。川戸道昭等編『年表』には彼の作品はおよそ36点あるが、そのうち明治10年代では10点(重版、再版を除く)、明治20年代では24点であり、彼の作品は殆ど明治10、20年代で出版されていることがわかる。明治10年代において、ヴェルヌものの次はルソー、フェヌロン、ユゴー、デュマ・ペールの作品が多く翻訳されている。デュマ・フィスの作品もあったが、彼の代表作『椿姫』に限られている。以上により、明治10年代の翻訳傾向がわかる。すなわち、一方において、自由民権運動の宣伝として政治と関係するものが多く翻訳され、一方において、政治と関係ないものとして、ジュール・ヴェルヌ、デュマ・フィスのような「西洋の人情」、「冒険」をテーマとするものも翻訳されている。しかし、明治20年代になると状況はやや変わってくる。ヴェルヌの作品は依然として多いものの、ボアゴベのものはヴェルヌのものを上回って、彼の名はおよそ41回出ている。その次は、ユゴーやガポリオー、デュマ・ペールとゾラのものが目立つが、30年代以降は、ジュール・ヴェルヌ、ガポリオー、ボアゴベのような冒険、探偵趣味のものは徐々に少なくなり、その代わりに、モーパッサンやドーデなど、フランス自然主義作家の作品が続々と翻訳されるようになる。これらの作品は日本の近代文学にのみならず、一部ではあるがまた中国語に再び重訳され、中国の近代文学にも影響を与える。

1.4 中国語に重訳された作品との関連

樽本照雄氏が統計した「日本語経由の欧米漢訳小説」の内訳を見ると、日本語経由で中国語に翻訳されたイギリスとアメリカの作品としては、アップワード著『外交奇譚』所収の12篇の徳富蘆花訳がすべて重訳されたほか、桜井鷗村「世界冒険譚」シリーズ3篇、黒岩涙香の探偵小説11篇が翻訳されている。フランス文学の中にはボアゴベとガポリオーの探偵小説が最も多く、あわせて11篇がある。その次はジュール・ヴェルヌの作品、7篇である(樽本、1996:47)。何故、これらの作品が再び重訳されたのか。勿論、中国国内の事情と関連があるが、こうした翻訳テキストの選択は日本側の影響が大きいと言える。表1.2

が示しているように、ジュール・ヴェルヌの科学小説やポアゴベの探偵小説は、日本でも最も多く翻訳紹介された作品であり、日本人に愛読されていたものでもある。

さて、その時期に、中国において、翻訳文学にはどのような発展傾向があったであろうか。次に清末民国初期の翻訳文学を具体的なデータから考察する。

表 1.2 作家別でみる明治期における翻訳されたフランス文学の作品(富田仁編『明治期フランス文学翻訳年表』による)

作者名	総点数	明治 10 年代	明治 20 年代	明治 30 年代	明治 40 年代
モーパッサン	148	0	0	73	75
ドーデ	64	0	13	34	17
モリエール	45	0	7	32	6
ヴェルヌ	44	16	24	2	2
ポアゴベ	44	0	41	3	0
ユゴー	41	2	24	13	2
ゾラ	33	0	8	19	6
デュマ	20	3	8	9	0
ガボリオー	12	0	12	0	0
フランス	12	0	0	0	12
ルソー	10	7	2	0	1
バルザック	9	0	2	7	0
デュマ・フィス	8	2	3	2	1
フローベール	8	0	0	0	8
ブールジェ	7	0	0	1	6
スーヴェストル	6	0	1	2	3
ウージェーヌ・シュ	5	2	1	2	0
ゴンクール	5	0	0	1	4
フェヌロン	5	4	1	0	0
ルネ・バザン	5	0	0	0	5
ロティ	5	0	2	1	2

2. 清末民国初期における翻訳文学

2.1 量的側面から把握する清末民国初期の翻訳文学

1840年のアヘン戦争以後 1911年の辛亥革命までのいわゆる清末、あるいは「晩清」という時代から 1912年中華民国の成立以後 1920年代までの中国は激動する時代でもあった。近代化を目指す中国の知識人たちは、いろいろな面で革命を起こし、中国を変えようとした。その一環として新興してきた文学の革命は、まず西洋文学の翻訳紹介から始まる。清末民国初期における翻訳文学は一体、どのように発展してきたのか。その総合的情勢を把握するために、まず量的側面から考察することが必要となる。その時期において刊行された翻訳文学の作品の数について、1998年に刊行された『中国近代翻訳文学概論』で、郭延礼氏はすでに具体的な数字を挙げている。氏によれば、1870年代から 1919年の五四運動までの 50年間の中国において現れた翻訳文学の中に、翻訳小説の約 2,569 篇に対して、翻訳詩は 100 篇近く、戯曲はわずか 20 余篇、その他散文や寓話、童話も若干翻訳されたが、数は少ない(郭延礼、1998: 28)。作品数の多さからも分かるように、清末民国初期においてもっとも多く翻訳されたのは外国の小説である。阿英氏もかつて自らの統計数字をもとに、創作作品と翻訳作品の割合の状況から、清末における翻訳小説の多さについて次のように説明している。

もし誰かが、晩清の小説は結局創作が多いのか翻訳が多いのかと訊ねたら、およそ当時の状況のある程度理解しているひとであれば、「翻訳が創作より多い」と答えるはずである。各方面の統計に拠ると、翻訳書の数は全体の三分の二を占める。(阿英、1937: 272)

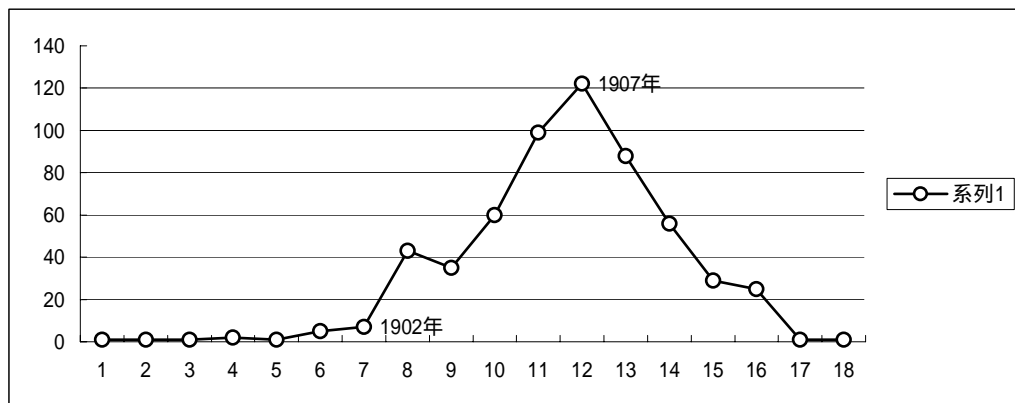
さらに、郭延礼氏は上記の著書において、この 50年間の翻訳文学史を萌芽期(1870~94年)、発展期(1895~1906年)、繁盛期(1907~19年)という三つの時期に区分し、それらの特徴を述べている。特に、発展期における推移状況については次のように語っている。

事実が証明したように、甲午戦争後〔1895年〕、とりわけ、20世紀後、翻訳文学作品が漸次に増え、しかも一直線の傾向で上昇した。(郭延礼、1998: 28)〔引用者訳〕

郭延礼氏が分析した発展期(1895~1906年)の翻訳文学の情勢は全体について

も言えるであろうか。まず、阿英氏の『晩清小説目・翻訳之部』を見てみよう。阿英編『晩清戯曲小説目・翻訳之部』は清末において刊行された翻訳小説 608 点が収録されている。これらの作品を出版年代未確認の 31 点を除き、年代別で配列して集計し、さらに、グラフ(図 2.1)を作成する。数値が示しているように、1882 年、1884 年、1894 年にもすでに翻訳小説が刊行されているが、量的側面で見ると、変化は大きくなかった。しかし、1901 年から翻訳小説の点数が徐々に増加し、1903 年に一つの頂点を迎えたあと、1907 年には 1903 年の発行点数の 3 倍に近い作品が出版されており、再び頂点を迎える。しかし、1907 年を境とし、その後、数は漸次に減り、1911 年にはわずか 25 点しか刊行されていない。

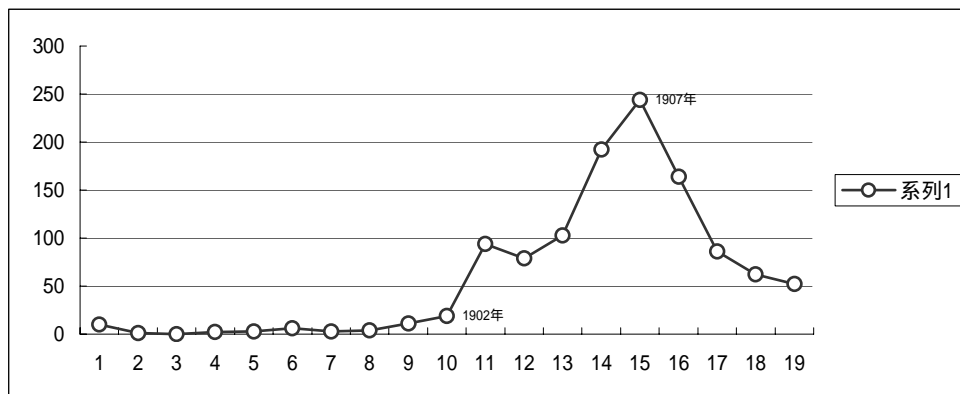
図 2.1 清末における翻訳小説の推移状況



阿英氏の目録に収録されている翻訳小説の数は少ないし、清末の翻訳小説だけであるため、以上の分析は不十分ではないかと思われるかもしれない。次に樽本照雄編『清末民初小説目録』のデータがどのような傾向を示しているかを見る。樽本照雄編『清末民初小説目録』に収録されている作品の数は阿英氏の目録よりかなり多く、収録範囲は 1840 年から 1928 年まで刊行された翻訳小説であるため、より正確的にその推移状況を把握することができる。氏は「清末民初小説のふたこぶラクダ」という論文に、自ら編集した『清末民初小説目録』に基づいて、全体、創作、翻訳という三つの項目に分け、年代別で統計した 1840 年から 1928 年までの中国で刊行された小説の点数のデータを発表している。樽本氏によると、上記の目録に収録されている 1840 年から 1911 年までの翻訳小説の数はおよそ 1,135 篇である。全体(創作と翻訳)の 2,372 種の三分の二にま

では達していないが、およそ二分の一を占める数である。筆者はさらに、樽本氏が発表したデータを基にして清末の翻訳小説に関する統計数値を抽出し、グラフを作成した(図 2.2)。これを阿英氏の『晚清戯曲小説目・翻訳之部』に基づいて得られたグラフ(図 2.1)と対照してみると、清末部分の結果がほぼ同じであることが分かる。

図 2.2 樽本照雄のデータによる清末の翻訳小説の推移状況

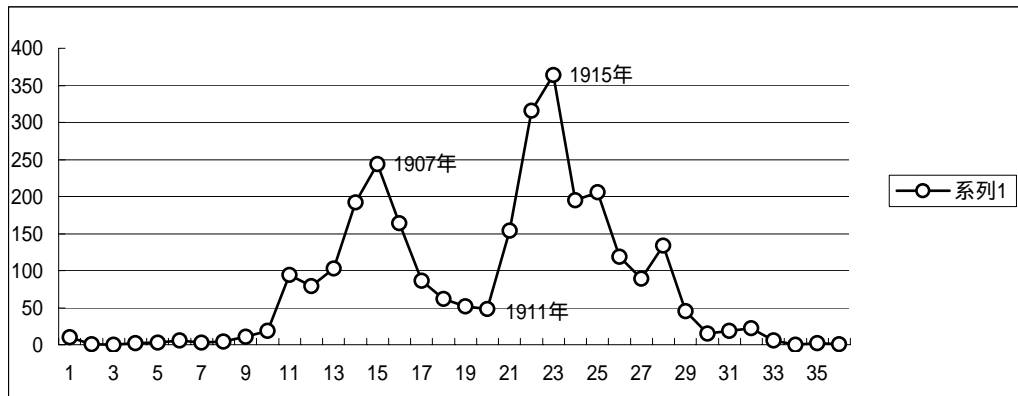


すなわち 1911 年まで、いわゆる清末における翻訳小説の情勢は、図 2.1 と図 2.2 が示しているように、1895 年、1898 年の時点では、翻訳作品の情勢は大した変化が見られない。量的変化が見られるのは 1901 年以降のことである。1901 年から 1907 年まではほぼ一直線で上昇したと言えるが、1908 年以降は年々減り、1911 年の辛亥革命前後では翻訳小説のみならず、創作を合わせて小説全体が低迷する。この分析結果から見ると、翻訳文学作品が「一直線の傾向で上昇した」ということは、1901 年から 1907 年までの、わずか 7 年間のことである。1908 年以降、1912 年、民国成立までは、翻訳小説は量的側面から見ると下降の傾向にある。したがって、清末の翻訳文学が徐々に発展し、増加する傾向にあったものの、やはり明治期日本における翻訳文学の発展状況と同様、上昇期もあれば低迷期もあったのである。

樽本氏が提供するデータに基づけば民国初期に刊行された翻訳小説の情勢も把握できる(図 2.3)。1912 年に民国が成立した後、翻訳小説の出版点数は徐々に上昇する。特に、1913 年から 1915 年前後までは翻訳小説の数はほぼ一直線で回復し、1915 年に刊行された翻訳小説の数は清末の最高点 1907 年の数を大幅に越えた。しかし、1919 年、つまり五四運動前後では、創作小説より、翻訳

小説の方が少なくなる。1920年はやや増えたが、その以降は徐々に減り、1928年までは、1907年、1915年を越えるような頂点は現れなかった。

図 2.3 樽本照雄のデータによる
清末民国初期における翻訳小説の推移状況



2.2 翻訳された作品について

清末において、もっとも多く翻訳された作品は何か。まず、国別で見てみよう。阿英氏の目録に収録されている作品を国別で集計してみると(図 2.4)、もっとも多いのはイギリスのものであり、その次はフランスのものである。4 番目に多いのは日本のものであるが、その時期に日本の作品が翻訳されたわけではなく、日本語に訳された西洋の作品を重訳したものが多く含まれている。しかし、民国時期には、その状況が変わる。1987 年に出版された北京図書館編『民国時期総書目(1911-1949)』の中の翻訳文学の作品数を統計すると、図 2.5 が示しているように、ロシアの作品が圧倒的に増え、イギリスやフランスの作品を抜いて、一位となる。これは明治時代における翻訳文学の発展状況とも類似している。最初の時期にはイギリスやフランスのものが多く、1910 年代前後から、ロシア作品の翻訳が盛んとなる。しかし、中国の翻訳文学は日本の翻訳文学とは明らかに異なるところがあった。明治時代の日本では、中国語からの西洋文学の重訳は少ないのに対して、清末民国初期では日本語を經由して翻訳された西洋文学が多数出版されているのである。

図 2.4 国別で見る清末における翻訳文学の内訳

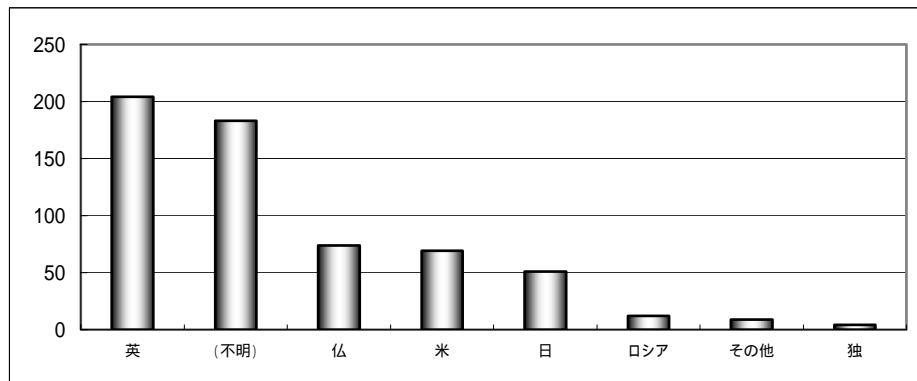
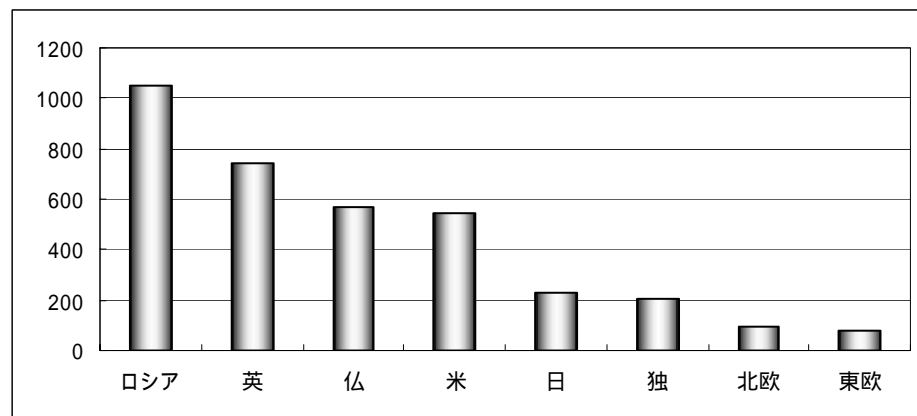


図 2.5 国別で見る民国時期における翻訳文学の内訳



さて具体的にはどのような作品が翻訳されたのか。再び、阿英氏の論説を引用してみる。阿英氏は『晚清小説史』の「第十四章 翻訳小説」において、当時最も多く翻訳された作品として四つの種類の作品を挙げている。氏に拠れば、「翻訳小説が初めて出てきたときには、目的は政治宣伝をすることだけだったので、いわゆる<政治小説>の風行が盛んであった」が、その次は「教育のためのもの」であり、三番目は「科学のためのもの」である。後期に至っては「探偵小説が中国に擡頭し、かつ風靡した」という（阿英、1937：280）。しかし、阿英氏の目録を分析すると、実際、政治小説の数は多くなかったことがわかる。周知のように、日本における政治小説は翻訳小説から始まった。とりわけ、明治15(1882)年前後には、多量の政治関係の西洋小説が翻訳出版された。しかし、中国においては日本から西洋小説が多数重訳されているにもかかわらず、日本

語に翻訳された主な政治小説は殆ど重訳されていない。唯一重訳されたのは加藤政之助に「纂訳」された（柳田、1966：63）と見られる『英国名士 回天綺談』の一篇である。

阿英氏の目録に収録されている日本と表記している51篇の小説を抽出し、作者別で集計してみると、もっとも多いのは押川春浪のものであることがわかる。その次は黒岩涙香の探偵小説、桜井彦一郎の冒険小説である。阿英氏の目録に収録されているイギリスの小説をテーマ別でみると、結果はやはり日本語作品の翻訳状況と同様である。コナン・ドイルの探偵小説がもっとも多く、およそ27点がある。何故、この時期において、探偵小説が多く翻訳されたのか。その理由について、阿英氏は「資本主義の中国での擡頭と、探偵小説なるものが、中国の公案や武俠小説と一脈通ずるところがあった」という二つの点に帰しているが（阿英、1937：280）、当時の国民を啓蒙するために、小説の「通俗」性を求める翻訳者たちの翻訳思想とも無関係ではないと推測できよう。特に、多数の雑誌を創刊し、積極的に西洋小説を翻訳出版した梁啓超の翻訳思想が当時の翻訳者たちに多大な影響を与えたと言える。

そもそも、中国において、最初に外国の小説の翻訳紹介を提唱したのは嚴復と見られている。1897年、嚴復は夏曾佑とともに発表した「本館附印説部緣起」（1897年、天津『国聞報』）という論文において、「説部」（すなわち小説）は経書や史書より人々の心にしみ入りやすいジャンルであり、風俗人情を描くに非常に適切であると力説した（嚴復、1897：12）。同年、康有為も中国初の外国書誌目録『日本書目誌』を編集刊行する際に、その目録に附している文章において小説の重要性に言及し、国民を啓蒙するために、特に普通の「民衆」に学識を与えるために、小説を翻訳することは急務であると語った（康有為、1897：12）。初めて「政治小説」という概念を導入した梁啓超は彼の「訳印政治小説序」（1898年、『清議報』）において、康有為の上記の論説を引用しながら、小説の「通俗性」を強調し、ヨーロッパや日本では知識人たちは常に小説を用いて、自分の政治思想や経験を訴えると論じたうえで、小説、特に政治小説が如何に社会変革に重要であるかを主張している（梁啓超、1898：22）。

通俗的な小説を用いて、国民（特に、字が読める程度の普通の民衆）の学識を増加させようという考えはおそらく、梁啓超の一貫した思想であろう。1902年、嚴復の訳著『原富』が発表されたとき、梁啓超は、嚴復の訳文の難しさを批判して、次のように言った。

このような奥深い書物、しかもこのように流暢な古文で書かれて、学童はどのように受け入れられるのか。(梁啓超、1902：267)〔引用者訳〕

これに対して、嚴復は次のように反論している。

私が従事しているのは、奥深い書物の翻訳であり、学生を啓蒙する目的ではなく、中国の古書を読みなれた知識人のために訳したのである。(嚴復、1902：517)〔引用者訳〕

さらに、嚴復は次のように説明している。

著訳を行うことは、何よりも国民に文明思想を与えるためであるが、国民といっても、個々の人は所有する知識が違い、立場が違うため、一緒にすることはできないであろう。〔引用者訳〕

明らかに、梁啓超は翻訳の目的を一般民衆、あるいは「学童」を啓蒙することにあるとするが、嚴復は「中国の古書を読みなれた知識人のために」翻訳するとする。このように一見同じような目的であるが、想定した「民」、いわば「読者」が異なるため、彼らが選択した翻訳作品、そして、それぞれが取った翻訳方法も違ってくる。嚴復は最初に小説の翻訳を提起した人物であるものの、『国聞報』には翻訳小説を載せたことがなく、嚴復自身も小説の翻訳に携わることもなかった。一方、梁啓超は、政治小説の重要性を積極的に訴え、翻訳だけではなく、政治小説の創作も試みた。

しかし、「政治小説」を用いて、社会変革を促進しようと主張した梁啓超の思想にはやや変化が現れた。1902年、自ら発行した『新小説』の創刊号に、彼は「論小説与群治之關係」(「小説と群治<社会>との關係を論ず」)という文章を公表した。その中で、彼は、「道德、宗教、政治、風俗、学芸、人心、人格」を新たにするには、まず小説を新たにしなければならないと、小説の社会的効用について力説し、自らの論点を推し進めて、次のように述べている。

一国の人民を新たにするには、まずその国の小説を新たにしなければならない。……何故であるかという、小説には人間を支配する不思議な力があるからである。(梁啓超、1902：37)〔引用者訳〕

単に政治小説の翻訳・紹介に力を入れた梁啓超は新たに「新小説」という概念を提起して、政治小説の翻訳だけではなく、小説全般の改革、いわば「小説界

革命」を唱えた。

同年、横浜で創刊した『新民叢報』に掲載された彼の「新民説」では、彼はさらに自らの主張を力説する。彼に言わせると、中国の社会を変革するために「国民の智慧を開化させるのは急務である」が、中国社会の不振の原因は国民の「公德」、「国家思想」、「進取冒険精神」、「権利思想」、「自由」などの不足にある。

政治小説から小説全般の革新へという梁啓超のこうした思想上の変化は、彼の翻訳する小説の種類を選択にも影響を与えた。政治小説だけを翻訳する梁啓超は1902年、森田思軒訳ジュール・ヴェルヌの『十五少年』を中国語に訳し、『新民叢報』に連載した。その後、『新民叢書』には、中国語に重訳されたガボリオーやボアゴベなど探偵小説も載せていた。

3. まとめ

以上、具体的なデータを中心に、明治時代の翻訳文学と清末民国初期における翻訳文学の総合的な情勢を分析した。

従来、明治時代は日本における翻訳文学が最も発達した時期であるという認識があったが、最近編集された翻訳文学の目録や年表を分析した結果、明治時代の翻訳文学は必ずしも一直線で発展してきたのではなく、量的にも明治35(1902)年から明治末(1912)までの10年間で刊行されたものがその大半以上を占めていたと分かった。しかし、明治10年代、あるいは20年代に、刊行された翻訳文学は数が比較的少ないとはいえ、果たした役割が大きいことも否定できない。翻訳によって、さまざまな異質の要素が伝えられ、文体の革新、文学様式の革新、さらに、日本人のイデオロギーの革新をもたらしたことは周知のことである。

この点で、実際、中国における翻訳文学も同様である。清末民国初期における小説の翻訳は、従来、阿英氏の言うように、翻訳は創作より多かったという認識があったが、量的側面からみて、とりわけ、日本と比べれば、翻訳は必ずしも隆盛したとは言えないのである。しかし、中国における翻訳文学が果たした役割を考えると、その影響力は決して少しも見劣りがしない。

本論で取り上げたデータを見ると、日本と中国における翻訳文学のもうひとつの共通の特徴が分かった。両国の翻訳文学の発展傾向を示したグラフは、いずれも一直線ではなく、隆盛の時期もあれば、停滞の時期もあった。これらの

増減する波をもたらしたのは様々な要因があると思われるが、おそらく、社会的・歴史的に不安定な要素もその一つではないかと考えられる。例えば、1911年、辛亥革命前後の中国において、翻訳小説の出版点数が最も低い時期であると同様に、日本においても、日清戦争の前後には翻訳文学の出版点数が低くなっている。

一方、両国の翻訳文学において異なる特徴も見られる。西洋文学の翻訳という意味での日本の翻訳文学は、特に初期には、中国文学の影響がまだまだ存在するとはいえ、中国語に訳された翻訳文学の影響は少ないのに対して、中国において、日本語に翻訳された西洋文学が数多く再び中国語に重訳され、中国に多大な影響を与えた。梁啓超のような翻訳者たちは、主に、国民を啓蒙することを翻訳の目的とし、小説の通俗性を利用して、文明開化の理念や知識、または革命の思想を国民に教えることを彼らの急務と見なしていた。このような知識や思想が織り込まれた科学小説や探偵小説はまさに国民を教育するに格好のジャンルであろう。勿論、日本語訳は英語からの重訳や翻案が多かったため、再び中国語に重訳されると如何に変貌したかが想像できる。しかし、これらの翻訳作品が大きな役割を果たしたことは否定できない事実である。

引用文献

- 阿英(1937)『晚清小説史』東洋文庫 349、中野美代子・飯塚朗訳、平凡社、1972年
- 阿英(編)(1971)『晚清戯曲小説目・翻訳之部』、楊家駱編『民国以来出版新書総目提要』所収、(台北)中国辞典館復館籌備処
- 郭延礼(1998)『中国近代翻訳文学概論』、湖北教育出版社
- 川戸道昭等(編)(1997a)『明治翻訳文学全集・新聞雑誌編 28・ヴェルヌ集』、大空社
- 川戸道昭等(編)(1997b)『明治翻訳文学全集・新聞雑誌編 31・モーパッサン集』、大空社
- 川戸道昭等(編)(2001)『明治期翻訳文学総合年表』、大空社
- 巖復(1898)『天演論・訳例言』、王栻主編『巖復集 5』所収、中華書局、1986年
- 巖復(1897)『本館附印説部縁起』、陳平原・夏曉虹編『二十世紀中国小説理論史料』第1巻(1897~1916)所収、北京大学出版社、1989年
- 巖復(1902)『与<新民叢報>論所訳<原富>書』、王栻主編『巖復集 3』所収、中華書局、1986年
- 康有為(1897)『<日本書目誌>識語』、陳平原・夏曉虹編『二十世紀中国小説理論史料』第1巻(1897~1916)所収、北京大学出版社、1989年
- 国立国会図書館(1972)『明治・大正・昭和翻訳文学目録』、風間書房

- 樽本照雄 (1992) 「清末民初小説のふたごぶラクダ」、『清末小説論集』所収、法律文化社
- 樽本照雄 (1996) 「清末民初の翻訳小説」、『大阪経大論集』第 47 巻第 1 号所収、大阪経大学会
- 富田仁 (1981) 『フランス小説移入考』、東京書籍
- 北京図書館 (編) (1992) 『民国時期総書目 (1911 - 1949)・外国文学』、北京書目文献出版社
- 柳田泉 (1966) 『明治初期翻訳文学の研究』、春秋社
- 梁啓超 (1898) 「訳印政治小説序」、陳平原・夏曉虹編 『二十世紀中国小説理論史料』第 1 巻 (1897 ~ 1916)、北京大学出版社、1989 年
- 梁啓超 (1899) 「飲氷室自由書 <一則>」、陳平原・夏曉虹編 『二十世紀中国小説理論史料』第 1 巻 (1897 ~ 1916)、北京大学出版社、1989 年
- 梁啓超 (1902a) 「論小説与群治之關係」、陳平原・夏曉虹編 『二十世紀中国小説理論史料』第 1 巻 (1897 ~ 1916)、北京大学出版社、1989 年
- 梁啓超 (1902b) 「介紹新著 <原富>」、牛仰山等編 『嚴復研究史料』所収、海峡文芸出版社、1990 年